

BEING

Case Study Book Series
B.C.B.

平均 2 ヶ月の遅延がゼロに改善 ～研究開発（R&D）における TOC 導入事例～

昭和電線ケーブルシステム株式会社

東京都港区虎ノ門四丁目 3 番 1 号
<http://www.swcc.co.jp/cs/>

導入企業：超電導体で世界トップクラス

昭和電線ケーブルシステム株式会社（以下 SWCC）は、大手電線メーカーの一角を占める連結売上 1,600 億超、従業員数約 5,800 名を抱える昭和電線ホールディングスの中核子会社である。

SWCC は超電導技術、熱電変換素子、無酸素銅製造など技術力に強みを持ち、早くから環境に優しい電線の開発にも取り組んでいる。また、夢の技術として今後大いに期待される超電導分野では、液体窒素使用の超電導体で世界記録を 2 度樹立するなど、世界トップクラスの技術を誇る。



課題：平均 2 ヶ月程度の遅れが常態化

新製品開発は、技術開発センターが担う主要業務である。新製品をいち早く市場に投入するため、開発期間短縮の努力はこれまでも行なってきた。

しかし平均開発目標期間 6 ヶ月に対し、平均 2 ヶ月程度遅れてしまうことが常態化していた。

「開発テーマの進捗が見えない、見えないので適切な手が打てない！」

これは当時、常務取締役長谷川センター長（現昭和電線ホールディングス取締役）が発していた言葉である。

活動内容：遅延理由を徹底的に分析・検討

技術開発センターのリーダー以上の全スタッフに対し CCPM の教育を行ない、遅延原因の入力を徹底した。その結果、遅延原因とその影響で遅れた日数・件数が事実として把握でき、技術開発センターが直面する問題が浮き彫りになった。

分析結果を見た長谷川センター長は驚いた。遅延のトップ理由として『目標特性が得られない』が、半年間の累積で、なんと 600 日以上もあったことが報告されたからだ。この R&D 特有ともいえる遅延理由に対し、徹底的に検討を繰り返した。

その結果、技術的要因は依然として存在するものの、スケジュール要因もかなり多く存在することが明らかになってきた。

成果：遅延ゼロ、平均 25% 期間短縮

以前と比べて開発テーマ数や技術的難易度はほぼ変わらない中、常態化していた平均 2 ヶ月間の遅延がゼロ。つまり平均 25% の短縮に成功したのだ。

